

毎月の配食に知恵を絞る

— 女性部総会開催 —

去る四月二十七日(日)代議員会に続き、女性部総会の開催となりました。

二十五年度の事業報告、二十六年度の事業計画も承認されました。

二十六年度は支部事業への協力として、毎月の配食、しあわせサロンバザー、会食会等があります。

安否確認の為にむつみ会員と一緒に届けます。お弁当は、各班それぞれ知恵を絞り、少ない予算の中で、対象者に喜んで頂けるお弁当ができています。

「おかわりございませんか」と声をかけてお弁当をお届けすると皆さん笑顔で迎えて下さいます。

今、地域においてさまざまな課題があると思いますが、女性部の活動

が少しでも役立つよう協力し、心がけていきたいと思っています。



調理中の女性部のみなさん

平成二十六年五月十三日、しあわせサロンに参加し、国営ひたち海浜公園に行く。総勢五十名で出発。翼のゲートより園内に入る。あいにくの雨なので、シーサイドトレインに乗りみはらしの丘に到着、ネモフィラが丘の斜面いっぱい雨にけぶる様に咲いていて、みはらしの鐘が鳴り響き幻想的な風景であった。阿字ヶ浦の丸得旅館にて昼食をとり、那珂湊のお魚市場で買い物をし帰路に着く。役員の皆様、女性部の皆様には大変お世話になり、楽しい一日を満喫出来、心より感謝します。

しあわせサロンに参加して

大高久子



国営ひたち海浜公園



みはらしの鐘



ネモフィラの丘散策

平成26年度 支部委員・福祉推進員名簿

支部長	鈴木 征夫	(幸 町)	推進員	川崎 晴男	(桜 町)
副支部長	大野 宏治	(当の越1)	同	高野 康司	同
同	井坂フジエ	(青葉町)	同	原田 とき	(当の越1)
同	荒川 隆夫	(南 町)	同	小澤 純子	同
会 計	飯島 卓男	(幸 町)	同	落合 敏明	同
会計監査	山本千代子	(東町1)	同	清水 光子	同
同	長谷川悦子	(当の越2)	同	深澤 恭子	同
支部委員	山本 雄三	(東町1)	同	郡司 寿子	(当の越2)
同	深澤 正弘	(東町2)	同	仲見川みえ子	同
同	飯村 洋司	(東町3)	同	深井 雅子	同
同	照沼 竹生	(東町4)	同	矢吹 葉子	同
同	鶴田 浩一	(仲 町)	同	長谷川 悦子	同
同	伴田 正行	(南 町)	同	秋山 文江	(友部栄町)
同	佐藤 勝利	(西町1)	同	金澤 寛美	同
同	赤尾杉友一	(西町2)	同	加藤 幸	同
同	福島 和彦	(桜 町)	同	鈴木ちよ子	同
同	石井 啓行	(当の越1)	同	瀬畑 洋子	(緑町1)
同	中島 輝彦	(当の越2)	同	郡司 文子	同
同	飯田 雅博	(友部栄町)	同	細谷 久子	同
同	村上 利夫	(緑町1)	同	大沼裕見子	(緑町2)
同	仲田 進	(緑町2)	同	金沢 泉	同
同	荒張 晴夫	(緑町3)	同	山内 直美	同
同	一戸 正三	(美原団地)	同	鬼沢 幸江	同
同	小室 義紀	(四つ葉荘)	同	小沼 英子	同
同	梅原 一樹	(青葉町)	同	大木理絵子	(緑町3)
同	中村 誠	(大沢中1)	同	佐久間紀枝子	同
同	斉藤八重子	(大沢中2)	同	野村ふぢ子	同
同	入江 廣	(大沢中3)	同	川又 和子	同
同	菅野 富雄	(幸 町)	同	大林 陽子	(美原団地)
推進員	大森 則子	(東町1)	同	小林 真弓	同
同	高丸 晃司	同	同	川崎 ひさ	同
同	近藤 修平	同	同	都 睦子	同
同	須藤 大輔	同	同	大塚 松寿	同
同	山本千代子	同	同	川合 守久	(青葉町)
同	鈴木 しん	(東町2)	同	桑野 博義	同
同	青木 重子	同	同	國府田桂一	同
同	友部 敏江	同	同	坂内 慎弥	同
同	渡辺 終吉	(東町3)	同	飯村 進	同
同	安達 俱子	同	同	鈴木 幸恵	同
同	飯村 洋司	同	同	飯田 弘子	同
同	土屋 圭巳	同	同	金澤つや子	同
同	栗股 克巳	同	同	前田 正	同
同	滝本 一男	(東町4)	同	井坂フジエ	同
同	阿久津龍治	同	同	稲毛 トク	(大沢中1)
同	橘川 節子	同	同	高屋まさい	同
同	山内 敏子	同	同	中村美千代	同
同	西田 竹男	同	同	菊地 正彦	同
同	下山田博幸	同	同	水越 健二	同
同	今成 弘	同	同	河原井 順	同
同	伊橋 理代	同	同	笠原 慶彦	同
同	荒川 昌之	(仲 町)	同	伊王野資豊	(大沢中2)
同	小林 廣	同	同	入 清	同
同	村上さよ子	(南 町)	同	下山 孝文	同
同	島川 智子	同	同	森田 功	同
同	鷺沼三枝子	同	同	原 修治	同
同	坂本 直美	同	同	堀口 恵子	(大沢中3)
同	福田 紀子	同	同	檜山 悦子	同
同	佐藤 初江	(西町1)	同	西野 良昭	同
同	須藤 康子	同	同	中澤 まさ	同
同	神崎 昭子	(西町2)	同	菅原 宗義	(幸 町)
同	横倉 きん	同	同	土屋 恭男	同
同	高倉 彰	(桜 町)	同	塙 昌克	同
同	田口 唯志	同	同	立木 定親	同
同	高安 たみ	同	同	会田 勝久	同
同	上野 昭子	同	同	鈴木 操	同
同	菅谷 正子	同	同	一柳 克平	同
同	佐久間 豊	同			

「中央支部だより」100号を記念して、前支部長藤枝義忠さん、松原秀和さん、初代女性部長瀬畑洋子さんに、当時をふりかえって玉稿を寄せていただきました。

楽しかった 支部活動



前支部長
藤枝 義忠
(平成13～16)

私は平成九年五月の支部総会において実行委員長の大役を受け、当時の支部財政は厳しい状況にあり、資金を確保することが当面の課題と考えました。そのためには支部役員と各区長さんとの対話が大切と思い、支部発行の書類は直接区長宅まで届け意思疎通を図り、会費・会費・福祉バザーの取り組みについて理解をいただき一定の資金を確保することが出来たことを思い出しました。

各種行事を消化するには、各区から実行委員一名の選出を願い、支部三役と実行委員・女性部長が一体となって諸行事を遂行してきました。

各種行事の中で一番印象に残っているのは、国策で「子供達にゆとりある教育」が進められ、土曜日が休校となりましたので、地域の方に喜ばれる「親子ふれあい運動会」を企画、支部役員会で貴重な意見を参考にし、友小で開催したところ、八百名前後の参加を得、いま走馬燈のように頭の中を巡っているところです。

最後になりましたが諸行事開催に当たり関係各位にお世話になりお礼申し上げますと同時に更なる中央支部の発展を祈念いたします。

「中央支部だより」 発行100号を記念して



前支部長
松原 秀和
(平成20～22)

昭和五十七年に第1号の広報誌が発行されてから今回の100号の発行に至るまで、広報委員の皆様には、大変なご苦労があった事と思います。私達を取り巻く環境は、少子高齢化に加え、生活様式の変化等、ますます厳しくなっています。

このような中で、中央支部の福祉活動は、

一、活動資金確保の為に会費の募集・バザーの開催

二、高齢者福祉活動の推進

三、地域福祉活動の推進

四、青少年健全育成の推進

等を重点項目とし、具体的に地域に密着した活動にするかを支部役員の方々が計画し、実行して来られました。

これらの活動を、「中央支部だより」の広報誌を通して、会員の皆様に見やすく、読みやすい紙面にして行く為に、広報委員の方々の努力により、毎号が待ち遠しくなる程でした。

今後も引続き支部活動を広報され、地域の皆様にご理解・ご協力を願えればと思います。

最後に、今100号の発行まで携わった歴代の広報委員・支部役員のご苦勞に感謝申し上げます。

100号発行おめでとうございます。

住民福祉の着実な推進を



初代女性部長
瀬畑 洋子

このたび、「中央支部だより」100号発行を迎えられますこと心からお祝い申し上げます。

昭和五十七年に第1号が発行され三十二年間の長い歴史を受け継いできた編集委員会の皆様に心より感謝いたします。

その歩みを振り返るとき、心を一つにして共に取り組んだ数々の活動が懐かしく思い出されます。

支部の重点目標を「地域に密着した福祉」ということで、さまざまな施策を進めて参りました。

昭和五十六年支部内の皆さんからご理解とご賛同をいただき、盛況きわめた福祉バザー。六十三年中央支部結成十周年を記念して「10年のあゆみ」を発刊、配布しました。

また、健康と親睦を深めた高齢者クラブクローケー・輪投げ大会を開催し熱戦、交流を図りました。

平成七年婦人部(現女性部)結成。働きかけにより理解と協力を得「ふれあいの心」「おもてなしの心」を大切に、共感スタートしました。

配食・会食・手づくり会・ミニサロン・学童支援など、喜びや楽しさを伝えて参りました。高齢者から子供までブロックごとに豚汁で温まった「親子ふれあい運動会」。各地区

三世代交流会は、地域の独自性を生かす活動を展開し、和やかな談笑は地域力そのものだと思います。

見て参加して楽しむ事業を実施することによって、きめ細かな地域福

祉につながることを思います。読みやすい親しみやすい魅力ある「中央支部だより」は、住民と支部社協のパイプ役を果されています。これからも、安心安全な住民福祉の向上に、活力ある未来へ着実な推進を期待したいと思っています。

三春城下町を歩く

東町四区 南 秀利

平成二十六年五月二十九日(木)、中央支部社協の役員研修として、福島県三春町を訪れた。

三春町は、江戸時代の正保二年(二六四五)、穴戸五万石の藩主秋田俊季が移封した城下である。穴戸で採用された家臣四十数家も移住した。穴戸から三春までは、三泊四日の行程であった。三春の瀧桜は、樹齢千年といわれ、日本三大桜に数えられている。

気温三十度の夏日の中を、三春城跡に登った。城は穴戸城と違い、山城で、バスを降りたところから登りであった。坂の途中に家老屋敷があり、さらに進むと、伊達正宗の正室



龍穩院本堂前

の愛姫生誕の地に出た。そこから本丸までいくつもの門跡を通って、やっと大手門から二の丸の広場に辿り着いた。本丸はさらに一段上で、城下の眺望の良いところであった。北方に高乾院や龍穩院などの寺院を見下ろせた。

大汗をかきながら、城跡を一周して昼食場所の八文字屋に着いた。昼食は三春名物の焙烙焼とうどんであった。

午後は、八文字屋から三春の街を歩き、高乾院と龍穩院を見学した。両寺とも穴戸から移転したものである。高乾院は、臨済宗で初代穴戸藩主秋田実季の寺院として建立された。本堂で住職の法話を聞いて、庭園や歴代の三春藩主の墓を見学した。

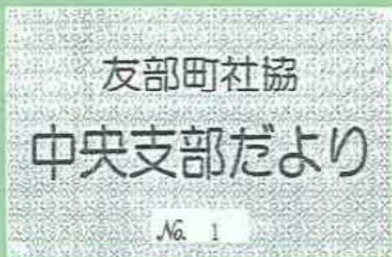
龍穩院は、曹洞宗で藩主の祈願寺であった。秋田から穴戸に移ってきた秋田実季が父愛季の戒名をとって龍穩院を穴戸の大田町に建立した。墓地の一番高いところに秋田家尊霊塔・八代藩主秋田長季の墓がある。当日、住職夫妻が不在のため本堂を見学できず残念であった。本堂は総檜造り、十四間に七間半の豪壮な建造物である。本尊の釈迦牟尼仏・和算額・藩主夫人の駕籠は文化財に指定されている。戊辰戦争時には傷病兵の病院にあてられた。穴戸の龍穩院の檀家の人たちは毎年三春の龍穩院を参拝している。

夏日の暑い中を友部と繋がり深い三春城下を探索した。瀧桜の季節にゆつくりと尋ねてみたい。真照寺(真言宗)は藩主の祈願所、福聚寺、歴史民俗資料館、田村大元神社など見どころいっぱい三春町である。以前、友部町が姉妹都市の申し入れをしたのうなずける。笠間市社会福祉協議会、友部公民館の労に感謝申し上げます。

中央支部だより 100号のあゆみ

タイトルのあゆみ

No.1～No.32

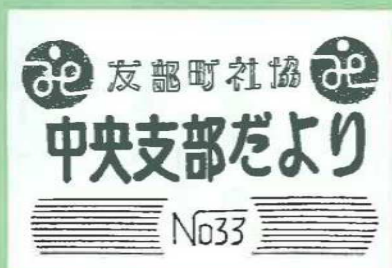


平成14年 しあわせサロン会食会



平成15年 第2回親子ふれあい運動会開会式の様子

No.33～No.56



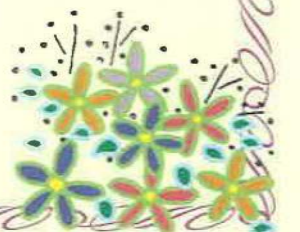
平成16年 第3回親子ふれあい運動会の様子



平成17年 しあわせサロン散策(吉田正記念館)



No.57～現在



丹さんと「戦艦大和」の模型

丹 順道さんに インタビュー

十八歳で海軍通信兵として
戦争体験

平成二十六年五月二十五日、鈴木征夫支部長と美原の閑静な住宅地に丹順道さんを訪ねました。居間に通されると、見事な「戦艦大和」の模型が目に入りました。一年以上をかけて制作されたそうです。挨拶がおわると、すぐに海軍に入隊した頃のお話をされました。日立工業学校を卒業と同時に、久里浜海軍通信学校電装科四期生に入隊され、猛訓練を経て、昭和十九年十一月に漁船を改造した軍艦(25名乗り)に乗り、敵艦の見張りに着きました。同二十年七月、北海道に向けて出航、十三日小名浜港を出てすぐに、アメリカ艦載機P51の襲撃を受け、左足を機銃の銃弾が貫通する重傷を負いました。乗組員の半数は戦死しました。丹さんはすぐに小名浜の特攻隊病院に運ばれ、オキシフル注射などの応急処置を施され、さらに土浦海

軍病院(現国立病院)に入院しました。国土防衛に燃えた青春でしたが、やがて終戦を迎えました。家族の方々にも話されていない貴重な戦時体験を伺いました。

戦後は、国鉄に入社、おもに保線区に勤務、牛久や友部本区の責任者となりました。昭和五十二年に、友部の現在地に定住しました。若いころから書道に興味を覚え、村田福岱に師事し、白龍書道会で腕を磨きました。村田師から翠岱の号を授けられました。

国鉄退職後は、書の腕を見込まれて、笠間稲荷神社の塙瑞彦宮司の書き役を勤めました。また自宅に書道塾を開き、子供たちに書道を教えました。大沢中二区の区長を十年、社協中央支部の広報委員、高齢者クラブ役員などを永年勤められました。「中央支部だより」の題字、民児協の広報誌「ぬくもり」は、丹さんの書です。

八十八歳を超えられても、元気な刺として、毎月書道誌に応募を続けられています。(文責・南秀利)

あとがき

「中央支部だより」の第一号を読んでみました。B4サイズの片面で発行は昭和五十七年七月。手づくりで中央支部の区域略図が載っており、当時は「友部駅公舎」もその一つになっていた、全部で15区域でした。

この年の事業計画目標は「地域住民が助け合いの心をもって、協力し、住みよい町づくりに努める。」となっています。

昔も今も目標は同じです。今年度も目標に向かって皆さん頑張ります。(大野)